

論 文 要 旨

申請者氏名 洪 忠婷

申請学位 博士（言語教育学）

主論文題目

副詞に関する研究—「なかなか」の意味・用法を中心に—

主論文要旨（邦文は4, 000字以内）

第1章 序論

本章では、研究の背景と目的、研究方法、論文の構成について述べた。

第2章 副詞に関する先行研究

本章では、まず副詞を概観したうえで、「なかなか」が属するとされる程度副詞と陳述副詞に関する文献調査を行ってまとめ、また、否定と呼応する副詞に関わる研究を紹介した。

第3章 「なかなか」に関する先行研究

本章では、「なかなか」に関する先行研究について、論文のほか国語辞典や用法辞典等広く文献調査を行い、内容を検討してまとめた。品詞（副詞、形容動詞、感動詞）や肯定・否定など文法的側面、および共起する語、意味・用法の分類と記述等について検討し、主張の違いなどを整理して問題点を探った。また、「なかなか」の古典としての意味用法についても触れた。

第4章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における「なかなか」の調査

本章では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を利用し、共起語に焦点を当てて、その使用状況を調査した。また、共起する動詞について従来の研究ではほとんど論じられていないため、本研究では、様々な形で使用される動詞（述語）を具体的に調査し、分析の資料となるよう整理した。

調査の結果、文法的否定形式を伴う場合は、動詞の否定形、動詞「ことができない」、形容詞の否定形、固定した文末表現形式「じゃない（か）」などという形が見られた。このうち、種類も量も非常に多く見られた動詞に注目すると、動詞の可能形、有対自動詞、動詞の受身、授受を表す補助動詞（の可能形）、動詞の意向形+とする、などがあることが分かった。中でも、動詞（特に他動詞）の可能形、有対自動詞と共起する例が多く見られた。

文法的否定形式を伴わない場合は、「なかなか」と共起する語句として形容詞・名詞などのほか動詞も一定数見られた。動詞の形式に注目すると、頻度順に、終止形（述語）、可能形（述語）、連体修飾用法、テイル形（述語）であった。

第5章「なかなか」の意味・用法についての考察

本章では、用例に基づいて「なかなか」意味用法の分析を行った。「なかなか」の用法を文法的形式と性質によって大きく否定表現、肯定表現、及び中間領域の3種に分類した。そして、「なかなか」が大きく肯否による2つの意味を持ち、それぞれが中核的な意味から広がりを持つことを主張し、用法を詳細に述べた。さらに、肯否の用法の連続性や慣用的表現についても明らかにした。

まず、否定表現における「なかなか」は、「期待される事象の実現を容易に見ることができないと捉える気持ちを表す」という意味が中核にあり、「期待」の度合いに関しては、話し手が事象との関係をどう捉えるかによって変わると考えた。そして、「話し手、聞き手などと関係がある事象について言う」場合と「話し手と直接的関係のない事象について言う」場合に注目して考察を行った。誰による「期待」か、「事象」と話し手との関係が深いかどうかによって、「期待」の度合いが異なるが、これは連続的なものと考えた。

次に、肯定表現における「なかなか」については、「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」という意味が中心にあると考えた。また、明示的に2つのものを比較する文では使われず、話し手による何らかの基準で程度を判断する表現である。そして、「何らかの予想や期待を持つ」場合と「単に自分の経験による基準に照らす」場合に注目して考察を行った。誰による予想・期待かは文脈によって異なり、基準に関しては連続的なものであることを用例によって明らかにした。

肯定表現における「なかなか」と共起する述語については、話し手にとって好ましい状態、歓迎する状態を表す述語が共起しやすい。「なかなか」が名詞と共起する場合、「の」を介す連体修飾と「の」を介さない連用修飾があり、調査の結果、使用される名詞に差が見られた。その中で特徴的と考えられるのは、使用例の多い「なかなかのもの」という例である。「もの」は、名詞の中でも中立的・形式的な語の一つであるが、この表現はある物事に対する話し手の高い評価を表すものであり、「なかなか名詞だ」と「なかなかの名詞」とが異なるグループであることの証左と言えよう。また、動詞述語と共起する場合、「程度性・状態性を有する」動詞の特徴は、その動詞の動作性（動き）が見えにくく、物事の様子、性質などを表し、「状態性」が現れてくるものと考えた。

3つ目の中間領域は、「文法的肯定、意味的否定」の用法と、「文法的否定、意味的肯定」（数は少ない）の用法に分類される。前者の「文法的肯定・意味的否定」に関しては、語彙的否定形式の場合（困難だ、大変だ、難しいなど）と語彙的否定形式ではない場合（忙しい、厳しいなど）の二つの場合に注目して考察した。この用法は、意味的には、否定表現における「なかなか」の用法と共通した部分があると考え、事象実現の困難度が高いと捉える気持ちを表すと考える。後者は、「悪くない」などがあり、「悪くない」全体で、肯定表現における「なかなか」と意味的に共通した部分があると考えた。

最後に、肯定表現、中間領域、否定表現の連続性について論じた。「文法的肯定・語彙的否定」の「なかなか」は、「なかなか」の肯定表現「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」用法に属するという点であり、この場合も、ある事象を実現させたい、期待される事象の実現が難しいという意味を表し、「なかなか」の否定表現の用法「期待される事象の実現を容易に見ることができないと捉える気持ちを表す」に近いと考える。否定の「なかなか」と肯定の「なかなか」とは、話し手の評価を表しているという点で共通することが分かった。

また、否定の「なかなか」は、話し手が期待を持っているが実現しないことを評価するものであり、肯定の「なかなか」は、話し手が期待を持っていて実現したことを評価するものであると考えられる。

第6章 日本語教科書における「なかなか」の扱いに関する考察

本章では、日本語教育の観点から、日本と中国で出版された初級から上級の日本語教科書を対象に、「なかなか」のどの用法がどのように扱われているかを詳細に調査した。その結果、意味用法の導入順において日中の教科書で違いがあるなど、新たな知見が得られた。

まず、初級教科書において「なかなか」が初めて導入される用法について見ると、日本の教科書のほとんどでは、否定表現の用法が先に導入されているのに対し、中国の教科書では、半数の教科書で、肯定表現の用法と中間領域の用法が先に導入されていることが分かった。また、否定表現の用法導入時に「なかなか」と共起する述語については、日本の初級教科書では、有対自動詞が多く提示されているのに対し、中国の教科書では、可能動詞が多く提示されおり、有対自動詞は見られなかった。

初級教科書における「なかなか」の3つの用法の詳細な使用法については、日本の初級教科書は、否定表現においては、話し手と関係があり、その結果事象実現に対する期待度が高くなりがちな用例が主として提示されている。中国の初級教科書も、否定表現においては、話し手と関係がある事象について言う場合の用例がほとんどである。中国の初級教科書の肯定用法に関しては、初めて使われた場合に主として、話し手の基準に照らして程度が高いという用例が提示されていることが分かった。

教科書全体における「なかなか」の出現数については、日本の教科書では、否定表現の用法が数多く提示され、肯定表現の用法と中間領域の用法は少なかった。特に初級教科書では、9割は否定表現が占めている。中国の教科書（初級段階から中上級段階まで一貫性を持って作成され、かつ使用されているという特徴を持つ）初級の教科書でも肯定用法がよく見られ、中上級の教科書では、否定・肯定・中間領域の用法がほぼ等しい種類数の教科書で扱われていることが明らかになった。

対照分析の結果、否定用法における動詞の種類と肯定用法における予想・期待の度合いに、日中で差が見られた。教科書作成者である中国語母語話者の、「なかなか」に対する理解が反映された可能性が示唆されよう。

第7章 「なかなか」の関連語に関する考察

本章では、日本語教育の観点から、「なかなか」の関連語について、ほかの副詞との対照を行い、意味用法を分析した。また、語用論の立場からも用法を検討した。

否定用法における「なかなか」と「あまり」は、動詞述語と共起する場合に置換え可能になることがある。「事象の実現を容易に見ることができない」ことを一般論として述べると、結果的に頻度が少ないことが推論されるため、「あまり～ない」の意味に近くなる。また、事象が話し手と関係の薄い事からの場合は「期待」の度合いも相対的に低いため、動詞の意味や文脈によっては「あまり～ない」との差が小さくなると考えた。

肯定表現における「なかなか」と「とても」は、用法の観点では、「物事の程度が高いと捉える気持ちを表す」ことを一般論として述べると、話し手の予想や期待の度合いも相対的に低いた

め、「とても」の意味との差が小さくなると考えた。また、目上の人を直接ほめてもいい場合でも、「とても」は使用できて、「なかなか」は予想が低いことを含意しやすいため使用できないことがある。さらに、「なかなか」には、話し手が聞き手の期待度を推測して言う用法が可能であり、人に勧める文脈で効果的であることがわかった。

「とても」と「かなり」は、用法の観点では、2つのものを比較する文ではなく、「話し手による何らかの基準で程度を判断したこと」を一般論として述べる時、「なかなか」と「かなり」の意味との差が小さくなると考えた。また、「なかなか」は、物事の様子、性質などを評価し、「かなり」は、物事の数量に近い性質を評価することができる点も異なると考えられる。

第8章 結論と今後の課題

本章では、各章で議論した内容を振り返り、本研究の結論を述べた。また、今後の課題についても述べた。